

1 研究の背景

本校は4つの科からなる農業高校で、1年次は各クラスとも2講座に分けて授業を行う。対象クラスはその中の1つで生徒数18名(男子16名、女子2名)である。1年次はオーラル・コミュニケーション(2単位)を学ぶ。素直で明るい生徒が多く、声もよく出てコーラスリーディングや質問に対する反応もよい。反面、説明が長くなると聞けない、一人ひとりが読む場面になると躊躇するなど、英語が苦手な生徒が多い。

2 リサーチエスチョン

単語の定着を図り、5～10語の英文を覚えさせるにはどのようにすればよいか。

3 予備調査1 授業観察の結果

A L TとのT T以外では文法事項を学習する。テキストの内容の難しい箇所は板書して補っているつもりだが、説明が長くなると逆効果で、また、生徒はテキストと黒板を交互に見て説明についていくのは意外と大変なことのようである。まとめのコーラスリーディングでは、全体的には大きな声が出ていたが、意識的にというより、とりあえず読んでいたといった感じだった。ほとんど読んでいない生徒が2～3人ほどいた。

予備調査2 英語力を示すデータ

4月の学習支援テストの結果は4クラスともほとんど差がないが、定期テストでは差がついた。時間が少なかったからか、緊張感が足りなかったのか、記述問題が多かったからなのか、理由はわからない。

予備調査3 アンケート、授業評価の結果

5月に行ったアンケートでは、83%の生徒が「英語は(どちらかといえば)嫌い」と答えた。その理由に「単語がむずかしい」というものがあり、音と文字が結びつかないところのつまずきが感じられる。会話練習のつまずきの理由も「単語が読めない」「文が覚えられない」といったことが72%を占めている。

予備調査4 生徒の自己評価

6月、7月に同じアンケートをした。活動に対する取り組み度の問いに「まあまあできた」とあいまいな自己評価の生徒が多い。7月はテスト前だったので少しよくなっているが集中できていない状況が見られる。ここでも「読む活動」にきちんと取り組みなかった理由に「単語がわからない」というものが複数あった。

予備調査5 文献研究

「アクション・リサーチのすすめ」(佐野先生著) 「全英連高知大会アクション・リサーチ報告集」

「アメリカの子供が「英語を覚える」101の法則」(松香洋子著)

4 仮説の設定

仮説1：毎回の授業で、発音、読みの反復の時間を増やせば、単語、文が覚えられるだろう。

仮説2：読みづらい発音はカタカナで表せば、単語の暗記、発音がスムーズにできるようになるだろう。

仮説3：基本的な語(人称代名詞、be動詞、do,does,did,疑問詞)の定着がよくなれば、その他の語の暗記も含めて、文が容易に覚えられよう。

5 計画の実践

(仮説1の実践方法)

- ・A L Tとの授業で行うテキストのポイントとなる文や単語を、毎時間のはじめに10分程度口頭で練習する。
- ・A L Tとの授業でウォームアップの際に既習事項を使う。
- ・授業の最初の挨拶の場面で、使える既習事項を使って話しかける場面をできるだけ持つてみる。

(仮説2の実践方法)

- ・読みづらい単語の難しいところは、カタカナを補って読みの練習をする。

(仮説3の実践方法)

- ・小テスト等を行って復習する時間をとる。
- ・問題を解いたり、解説する度に復習となるような質問も入れていく。

6 実践の結果

(仮説1の実践)

TTの授業ではウォームアップとしてウィスパークゲームを行い(板書はカタカナ書きでも可)、その伝達文として既習の文を利用した。ALTとキーセンテンスを板書し、フレーズで切ってリピートさせ、次に単語をいくつか消し練習させた。ALTとのTT以外の授業の際に毎時間の最初の10分ほどをさいて、O.C.のテキストのポイントとなる文や単語の練習をさせた。まずテキストのコーラスリーディング、次にテキストを閉じて、日本語を与え、全体で言わせた。定期テストの範囲を区切りとし、既習事項も言わせ、また次回にTTで取り扱う事項も言わせ、暗記を促した。意味のかたまり、フレーズを意識させるように指導した。個々が練習しているかできるだけ注意した。全体でも定着が悪い部分は繰り返し練習させた。既習事項を使って、授業の最初に時々質問をした。必ず説明を加え、理解できなかった生徒にも再確認させるようにした。

(仮説2の実践)

発音、読みの練習の中で、生徒がつまづいたり間違えたりする時、その部分をカタカナ書きで示し、つづりと音の違いを説明した。何回か練習した後消してまた発音させ、定着を図ろうとした。

(仮説3の実践)

中学校3学年間に学習する900語程度の中にも含まれる、動詞、名詞、形容詞以外の、文を構成するうえで必要な主な基本語100語の単語テストを行った。中間テストまで3回小テストを行った。文法の学習をしている時、人称代名詞などできるだけ短時間で基本的なことを復習させるよう努めた。

7 結果の検証

- 1 定期テストに反復練習をしたキーセンテンスの語句を正しく並べかえる問題を2問ずつ出して、正答率を調べた。単語の写し間違いがあっても順序があていければとした。正答率は中間テストが100%、78%、期末テストが89%、72%で反復練習の効果がある程度あったと思われる。1学期期末テストの正答率は89%、44%となっており、2学期は安定して点を取れたようである。
- 2 9月当初に行った100語の単語テストは、人称代名詞、前置詞、助動詞などを問うテストだったので答えにくさも手伝ってかとも点が低かった。平均点が12点(100点満点中)、最高点が56点、最低点が0点(2名)だった。いかに単語を正確に覚えていないか(例:あなたは、あなたの)浮き彫りとなった。また3回行った小テストでは、あまり変化は見られなかった。まじめな生徒の安定した点に対して、声を出していない生徒、意味を考えずに練習をしているような生徒は点が低かった。
- 3 2学期末に授業について、自分自身について問うアンケートを行った。毎時間の初めのキーセンテンスの反復練習については56%の生徒が「よかった」と答えた。「飽きてきた、自分のでき具合がわからなかった、覚えているものもあったけど、覚えていない単語もあった、少し言うのが速いのでついていけず覚えられなかった」という理由で「どちらともいえない」と答えた生徒が39%いた。長期間に渡って全体で続けて活動させていく難しさが表れていると思う。習慣づけと飽きさせない工夫、全体と個々の活動のそれぞれの定着度のはかり方など、課題は多い。「よかった」と答えた生徒は「英語が覚えやすくなった、読みやすくなった、少しわかってきた、テストに役だった」と感じている。5月のアンケートでは、会話練習のつまづきの理由に「単語が読めない」「文が覚えられない」といったことが72%を占めていたので、少しは改善したのではないかとと思われる。また、反復練習をまじめにできたかの問いには72%が「たいへん・ほぼまじめにできた」と答えている。3学期も続けた方がよいと67%が答えている。その理由を見ると、声を出して読むことが覚えることにつながると実感しているのがわかる。その他、自分なりの英単語を覚える努力に対する質問では「少しできた」と答えた生徒が最も多く55%を占めた。「できた」と答えたのは22%で、自学自習の習慣づけが依然として課題である。
- 4 授業は火曜日の2限目と金曜日の5限目にある。9月は暑くて集中が悪かった。10月、11月は改善されたが5限目は眠くてつらそうだった。それでもこのクラスはよく声が出て素直に活動に参加したが、考えずに口だけ動かしているような場面も多かった。生徒がアンケートに書いてあったように、自分の理解度に疑問を持ったこともうなずける。既習事項を使って授業の最初に質問をしたりしたが、ムードメーカーの生徒たちがまじめに受け答えをしてくれると、効果的に話が展開することもあった。また質問もよくしてくれるので、他の生徒にとっても助かる存在である。

8 成果と今後の課題

2学期が始まるととりあえずフィールドノートを取ったり、確認のテストをしたりで、落ち着いて考える時間が持てなかった。継続してできたこともあれば、途中であきらめてしまったこともあり、もっと計画を綿密に立てるべきだったと思う。また、最初と最後で同じアンケートをするべきだったと思うが、同じものはできなかった。明確な比較ができないままで終わってしまった。

反省が目立つ取り組みだったが、この研修はマンネリ化した自分の教え方、見方を振り返る機会になった。常にリサーチクエスチョンは気になっていて、授業中もそれなりに取り組んだ。明確な結果は出なかったが、授業の最初に反復練習をさせたことは、ある程度効果があったと思われる。音読の大切さを再確認した。同時に、飽きさせない工夫と生徒がどれくらいできているか自己確認できる方法を考える必要がある。また、基本的な語を定着させる方法にも課題が残る。継続して取り組ませ習慣化させれば

できることが増えてくるように思われる。